

「花王フェローシップ・プロジェクト」への参加を終えて

港区立高輪台小学校

久保田 謙

A) プロジェクトの体験とそこで学んだこと

2005年8月8日から20日まで、スリランカ ポロンナルワにてトクマカクの行動調査にボランティアとして参加させていただきました。チームは日本人2人、アメリカ人2人の4人編成と小規模であったため、コミュニケーションもとりやすくチームワークもよかったように思う。調査場所は、ポロンナルワの遺跡の中であり、森の中での活動を想像していた自分にとっては多少物足りない思いもあったが、調査自体は興味深く楽しんで参加できるものであった。Dr.Dituss やスタッフもみな親切で調査中に不安になる場面はなかった。

主な研修内容は以下の通り。

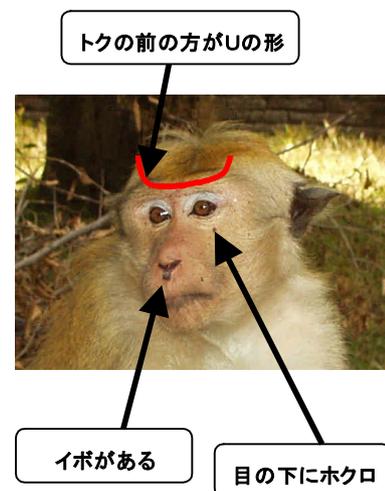
①植物の識別方法の習得

植物（主に樹木）の幹、葉、花、実などの特徴から植物を識別する。約20種類の植物の名前と特徴を覚えるのだが、特徴のはっきりしている樹木が多く日本では見ることのない樹木が大半であったので非常に興味を持って取り組むことができた。なかでも、果実がガムのようにネバネバとした液を出す **CORDIA** や他の樹木を包みこむようにして成長する **FICCUS AMP** などが深く印象に残った。**FICUSS AMP** は当初、他の樹木と仲良く成長するように見え、「道徳の教材に使えるかな。」と考えていたのだが、最後には包みこんだ樹木を枯らしてしまうと聞いて断念した。



②マカクの識別方法の習得

調査スタッフの指導のもと、マカクの身体の特徴で固体を識別する方法を習った。これは、特定のマカクを継続して観察していくうえで大変重要なことである。トクモンキーはその名の通りトク（頭頂部の毛）に特徴がある。トクが頭の外側まで長く飛び出しているものや、分け目の有無などの形状を確認しカードに記入していく。そのほかにも顔や毛の色、傷やほくろの有無や位置、耳の形等でも個体の識別を行う。それらを細かく見ていくうちに、初日にはどれも同じに見えていたサル顔が、それぞれとても個性的であることが分かってきた。



③マカクの生態系の観察・記録

グループ全体の行動範囲の記録および、特定のマカクの行動記録をとる。行動範囲の記録は、地図上に行動した軌跡とその時点での時間を記入していく。特定のマカクの記録は、1分ごとにマカクの行動をノートに記録していく。共通の記号を用い、マカクが食事しているのか、休んでいるのか、動いているのかなどを記録するのだが、特に食事に関しては、何を食べているのかを詳細に記録する必要がある、初日に習得した植物の識別方法が役に立った。

④データ整理

毎日の観察記録のサマリーを行う。専用のシートに、どのサルがどれだけの時間をそれぞれの行動に費やしていたか、また食事をしていた場合にはなにを食べていたのかを細かく記載していく。

⑤レクチャー、ディスカッション

期間中に数回、Dr.Dittusによるレクチャーがあり、内容は今回のプロジェクトの概要や調査場所に生息する4種類のサルの説明、自然保護活動の現状等であった。最終日には集計されたデータをもとにディスカッションが行われた。



調査を行っていく中で最も気になったのは、調査場所にゴミが散乱し、そのゴミをサルたちがあさっている光景を頻繁に目にしたことである。実際に、最終的なデータ統計をみても期間中のサルの食料のうち20%以上がゴミであった。なかには観光客が投げ捨てたと思われるココナッツなども含まれており、説明を聞いた限りでは、現地の人々の感覚として、ゴミをまとめて、もしくは分別してゴミ収集に出すような習慣がもともとないということも大きな原因の一つのようである。プロジェクトスタッフは、「The Clean Reserve Project(CRP)」として、放置されているゴミのそうじ、ゴミのポイ捨てをやめるような呼びかけやポスターづくり、ごみ箱の設置の設置

行っており、徐々に成果は上がってきているようだが見た限りではゴミを無くすまでの道のりはかなり険しいように感じられた。しかし、CRPで期待しているのは、自然環境をできるだけ守ろうという、人の気持ちを育てるということであり、これに時間がかかるのは当然のことであろう。これからの未来をにやう子どもたちへの教育も欠かせない。それにはわれわれ教育に携わる者の意識を高めることも重要である。その活動内容は決して特別なことではなく、日本でも通常行われているような活動であり、このことは、我々一人ひ

とりが自然環境のためにできることがまだまだある、ということにあらためて気づかせてくれた。

3) 今回の体験が学校教育にどのような意味を持つか。

校内では、パワーポイントで作成した資料を用いて、児童に今回のプロジェクトの概要から調査方法、プロジェクトで自分が感じたこと、そして児童に考えてもらいたいことなどを報告した。特に、ゴミ問題もふくめた自然環境保全に関しては多くの時間をさいた。このような問題はスリランカ国内だけの話ではなく、世界各地、もちろん日本国内においても重要な問題だということ、その問題に取り組んでいるアースウォッチのような組織があること、そして今の自分たちに何ができるのかを考えることの重要性などを説明した。また、今回の研修で自身が身につけることができた、野生生物の生態調査に関するスキル（植物の識別方法、トクモンキーの識別方法など）は、身近な生物の観察にも役立つことだと考える。この方法に関しては、資料作成時に児童に分かるよう図や絵などを入れながら作成した。また、継続的に観察することや、それをメモすることの意味、グループで観察するときに重要なことなど、児童がこれから生物の観察やグループでの調べ学習などの活動を行う際に大切なことなども資料の中に盛りこむことができた。今回は国籍や言語の異なるボランティアが集まったグループであったため、相互理解の重要性はその大切さをあらためて痛感した。そのため言語(特に英語)や異文化理解の重要性も意識して子どもたちに伝えていきたいと考えている。

また、今後は区のHPである「みなと子どもWeb」からの情報発信も考えており、校内だけでなく、できるだけ多くの子どもたちに自分の体験を伝えていきたい。



3) 来年のフェローシップ開催に関して

今回のような機会を得られることは教員にとって大変意義深いことだと感じています。資料を読んだり聞いたりしただけの情報と実際の体験談とでは、それを説明したとき児童が受ける印象が変わってくるはずです。今後も継続していただけることを望みます。費用の面に関しては、航空費用や諸経費などかなり格差があるので、全プロジェクト一律ではなく、プロジェクトごとに設定いただけたらと思います。また、マカクの捕獲や計測に関しては今回体験できなかつたのが残念でした。体験できると子どもたちに伝えられる情報の質がさらに上がるのではないかと思います。